鳥取の民話

38

収録・解説　酒井董美（ただよし）

米出し地蔵

（東伯郡三朝町大谷）

語り手　山口忠光さん
（明治40年生まれ）
昭和63年8月21日収録

あらすじ

昔、おじいさんとおばあさんと暮らしとった。

正月前になって、おばあさんが機を織って木綿を作り「木綿を持って、町で餅米（もちごめ）やいろいろ買ぁてきなへ」と渡したのだって。

だけど正月前で木綿を買ってくれない。しかたなくもどっていたら道端のお地蔵さんが寒そうだった。木綿をお地蔵さんの首へ巻きつけ、自分の笠（かさ）をお地蔵さんにかぶらしてあげてわが家へもどってきた。

「町ぃ出たけど、木綿はみなは買ぁてごしぇんし、しかたがないと持ってもどったら、お地蔵さんがあんまり寒げにしとんなはったけえ、木綿一反、首に巻いてあげ、笠もおれのをかぶせてあげてもどったわい」「餅米もないし何にもよう買わなんだけど、お粥（かゆ）でも飲んで辛抱しようよ」

「ええことをしなはった。お地蔵さんが喜びなはるわい」

そのまま寝ていたら、お地蔵さんが夢を見せられた。「ええもんを巻いてごした。まんだいいようなこと言うけど、この家へ来させてごさんか」と言われる。

明くる日。おじいさんはお地蔵さんを負って家に連れてもどった。屏風（びょうぶ）の縁にお地蔵さんを置き、火を焚（た）いてあたらしてあげたら、お地蔵さんの鼻の穴からポロリポロリ米が出だした。

入れ物を持ってきて受けていたら、隣のおばあさんがやって来た。「うちもその地蔵さんを貸してごしなはれえな」と言う。「おれの地蔵さんでないけえ貸せまいちゅうことは言えんけど」言ったら、隣のおばあさんは「借りていなにゃいけん」と、そのお地蔵さんを借りて帰って、囲炉裏（いろり）の縁から当たり当たりしていたら、やはりお地蔵さんの鼻から米がポロリポロリ出だしたそうな。

そのおばあさんは欲ばりだったから「これだけじゃあ少ない。もっとよけい出さにゃいけん」というので、火箸を焼いてそれを地蔵さんの鼻の穴につっこんだそうな。そうしたら出ていた米がポロッと止まってしまって、もうどうしても出ないようになった。

だから、欲ばってもいけないし、人のまねをして人よりようなろうと思ったっていけないから、自分相応の暮らしをするということを考えなければいけないからな。昔こっぽり。

イラスト・福本隆男

解説

関敬吾博士の『日本昔話大成』から、この昔話の戸籍を紹介すると、本格昔話の「大歳の客」の項目の中に「笠地蔵」として登録されている。鳥取県内で類話を探してみると、岩美町田後と鳥取市河原町山手の2カ所で収集されていることが分かる。

ここでは山口さんのみごとな語りを味わっていただきたい。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。